

感謝の気持ちを込めて

福島

子ども健康
プロジェクト

あゆみ

2011 ~ 2022

Hello



福島子ども健康プロジェクトだより

Vol.1

生活記録づくりを通じて、福島親子の「新しい日常」への伴走

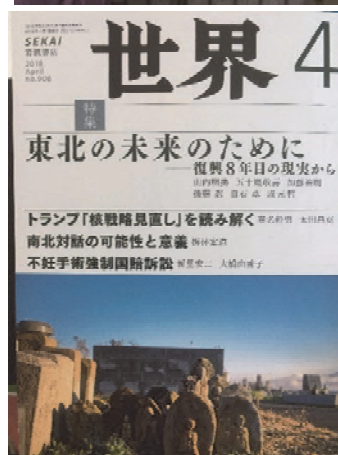
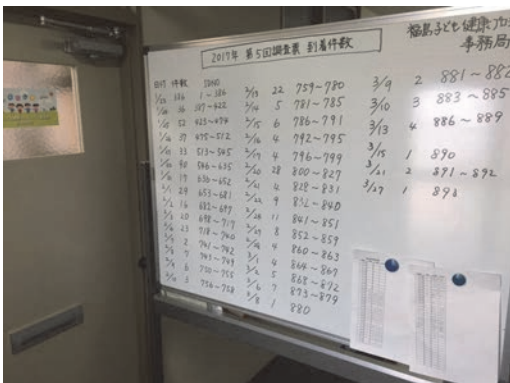
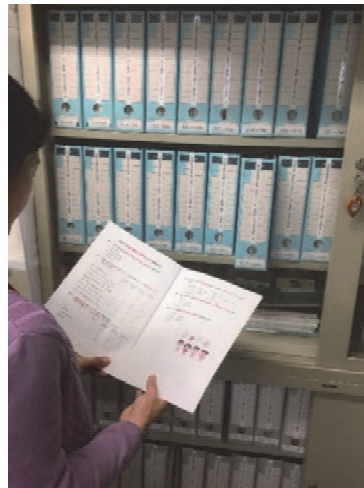
福島子ども健康プロジェクトは、3.11後、避難区域外の福島県中通り9市町村で子育て中のお母さんたちが感じていることを記録として残すために、2013年から毎年1月にアンケート調査を行ってきました。アンケート調査では、その時々のお子さんやお母さんの生活の様子と健康状態、地域での生活などについてたずねています。時が経つにつれ、親子の暮らしと健康がどのように変化していくのか、お子さんが成人するまで定期的に記録し、必要な施策につなぐとともに、次の世代に伝えることが、その目的です。東日本大震災・福島原発事故という非日常から「新しい日常」への道のりを、生活記録づくりを通じての伴走です。

日々お忙しい中、難しいかもしれませんが、年に一度、立ち止まって、私たちと一緒にお子さんとご自身について記録を残す作業にお時間を割いていただけませんか。あわせて、毎年、アンケート調査対象者に福島県内でお会いして1時間ほどインタビューも行っています。当プロジェクトの事務局から連絡がありましたら、ご都合がつく方はインタビュー調査にもどうぞよろしくお願い申し上げます。

2018年5月8日

福島子ども健康プロジェクト

成元哲





活動記録



(下線のあるものは、福島子ども健康プロジェクトのホームページからダウンロードしてご覧いただけます)

- 2011.11 「子どもたちを放射能から守る全国ネットワーク」の関係者にインタビュー調査(東京都)
- 2012.2 避難・保養のための全国集会「放射能からいのちを守る全国サミット」(福島市)に参加し、避難・保養をめぐる相談の様子を取材。
- 2012.6 福島県母親大会(二本松市)に参加し、取材。
- 2012.6 福島市内の母親サークルの主催者へのインタビュー調査。
- 2012.6 福島市内の幼稚園・保育園の園長、保護者、保育士へのインタビュー調査。
- 2012.11 福島県中通り9市町村の子ども関係部署の担当者にインタビュー調査。またアンケート調査に対する後援名義使用を申請し、8市町村から承認を得た。
- 2012.11 コープふくしま、福島民友新聞社、福島民報社からアンケート調査の後援を得た。
- 2013.1 第1回アンケート調査を実施。
- 2013.1~3 調査対象者からアンケート調査に対する苦情や意見が多数寄せられた。
- 2013.2 福島市、郡山市でアンケート調査対象者にインタビュー調査の実施。
- 2013.3 NHK熊本「ニュース番組 東日本大震災2年 特集:水俣の教訓を福島の子どもたちに」の番組で当プロジェクトの調査研究が紹介された。
- 2013.3 中日新聞「線量の不安は?暮らしは? 避難地域外の母子調査 中京大など 福島9市町村で数年追跡」で当プロジェクトの調査研究が紹介された。
- 2013.6 環境三学会合同シンポジウム2013「原子力被害とその救済」(明治大学)にて「終わらない被災の時間ー福島県中通り9市町村の原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」という題で報告。
- 2013.6 調査対象者が「調査票が送られてきて、震災・原発事故を思い出し、眠れなくなった」と福島県弁護士会に人権救済申立し、当プロジェクトはそれへの答弁書を提出。
- 2013.7 第1回調査報告書を作成し、調査対象者、福島県庁、9市町村役場、報道機関に送付。
- 2013.9 調査結果の報告会&親子でできるストレスマネジメント講座を福島市(福島市民会館)と郡山市(ニコニコこども館)で開催。
- 2013.9 福島市、郡山市でアンケート調査対象者にインタビュー調査の実施。
- 2014.1 第2回アンケート調査を実施。
- 2014.3 福島市でアンケート調査対象者にインタビュー調査の実施。
- 2014.4 第2回「原発と人権」全国研究・交流集会(福島大学)で調査結果を報告。
- 2014.7 第2回調査報告書を作成し、調査対象者、福島県庁、9市町村役場、報道機関に送付。
- 2014.9 『中京大学現代社会学部紀要』に「1,200 Fukushima Mothers Speakーアンケート調査の自由回答にみる福島県中通りの親子の生活と健康」を掲載。
- 2014.9 『アジア太平洋レビュー』(11号)に「福島原発事故後における「自主避難」の社会的規定因ー福島県中通り地域の母子調査から」を掲載。



- 2014.10 『ストレス科学研究』(29号)に「福島県中通りの子育て中の母親のディストレス持続関連要因－原発事故後の親子の生活・健康調査から」を掲載。
- 2014.11 『中京大学現代社会学部紀要』に「700 Fukushima Mothers Speak－2014年アンケート調査の自由回答にみる福島県中通りの親子の生活と健康」を掲載。
- 2014.12 「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発訴訟の原告弁護団からの依頼で福島地方裁判所に意見書を提出。
- 2014.12 環境社会学会シンポジウム(龍谷大学)にて「水俣と福島の経験から」の題で報告。
- 2015.1 第3回アンケート調査を実施。
- 2015.1 当プロジェクトの成元哲が福島地方裁判所で原発事故被害立証のための専門家証言。
- 2015.3 福島市でアンケート調査対象者にインタビュー調査の実施。
- 2015.3 第1回アンケート調査の成果を書籍『終わらない被災の時間』として刊行。
- 2015.3 NHK熊本「クマロク 東日本大震災4年 福島の子どもと母親への影響調査まとまる」の番組で、当プロジェクトの調査成果『終わらない被災の時間』が紹介された。
- 2015.5 毎日新聞「東日本大震災：福島第1原発事故 2013～15年にアンケ「福島子ども健康プロジェクト」成元哲・中京大教授に聞く／福島」で当プロジェクトの調査研究が紹介された。
- 2015.6 原発事故子ども・被災者支援法3周年シンポジウムにて「福島県中通りの親子の生活変化と健康状態－原発事故からの真のレジリエンスを求めて」の題で講演。
- 2015.11 第3回調査報告書を作成し、調査対象者、福島県庁、9市町村役場、報道機関に送付
- 2016.1 第4回アンケート調査を実施。
- 2016.2 朝日新聞「(東日本震災5年 福島からの報告:1)事故5年、消えない不安と溝」に当プロジェクトの調査研究が紹介された。
- 2016.3 近畿弁護士連合会シンポジウムにて「福島原発事故後における自主避難の社会的規定因」の題で講演。
- 2016.3 福島市、郡山市などでアンケート調査対象者にインタビュー調査の実施。
- 2016.4 愛知県被災者支援センター主催の「県外避難者の現状と支援を考える公開セミナー」で、「福島原発事故後の生活変化と健康影響」の題で講演。
- 2016.5 「水俣病公式確認60年記念特別講演会」(東京大学)にて「被災者たちの声：水俣と福島」の題で講演。
- 2016.6 第4回調査報告書を作成し、調査対象者、福島県庁、9市町村役場、報道機関に送付。
- 2017.1 第5回アンケート調査を実施。
- 2017.1 「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発訴訟の原告弁護団からの依頼で、意見書2を福島地方裁判所に提出。
- 2017.1 広島弁護士会シンポジウムにて「原発事故被災地滞在者の生活障害について」という題で講演。
- 2017.3 福島市、二本松市などでアンケート調査対象者にインタビュー調査。
- 2017.3 『中京大学現代社会学部紀要』に「原発災害からの生活復興とはなにか－2015年調査の自由回答欄にみる福島県中通りの親子の生活と健康」を掲載。



- 2017.6 第5回調査報告書を作成し、調査対象者、福島県庁、9市町村役場、報道機関に送付。
- 2017.7～8 福島市、郡山市、本宮市、二本松市でアンケート調査対象者にインタビュー調査。
- 2017.8 原水禁世界大会報告集会（名古屋市北医療生協）にて「福島第一原発事故から考える被ばく：子ども達のいま」という題で講演。
- 2017.12 NHK 福島のディレクターとの対談をホームページに掲載。
- 2018.1 第6回アンケート調査を実施。
- 2018.3 原発事故から7年を迎えて：福島子ども健康プロジェクトの見解をホームページに掲載。
- 2018.3 NHK 福島「ハートネットTVシリーズ東日本大震災から7年 第3回 母親たちの原発事故―“消えない不安”の日々」で、当プロジェクトの調査研究が紹介された。
- 2018.3 福島市、郡山市でアンケート調査対象者にインタビュー調査。
- 2018.4 NHK 福島「おはようふくしま」に当プロジェクトの調査研究が紹介された。
- 2018.4 『中京大学現代社会学部紀要』に「原発不安に関する考察」、「福島原発事故から『新しい日常』への道のり」、「持続する不安、前向きな態度」を掲載。
- 2018.5 第6回調査報告書を作成し、調査対象者、福島県庁、9市町村役場、報道機関に送付。

保護者の方からの声

こうして、アンケートや、調査をしている所も、ほとんど減ってきている中、このことについて、大事に大切に調査してくださっている方がいらっしゃると思うと、力にならなければ！そして、この様な事が二度とおきないようにしなければならぬと思います。（郡山市のSさん）

皆様からのお便りやご意見をお待ちしています。

下記までお寄せください。

福島子ども健康プロジェクト

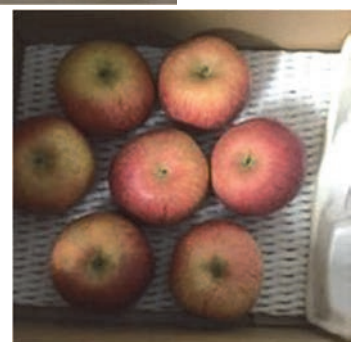
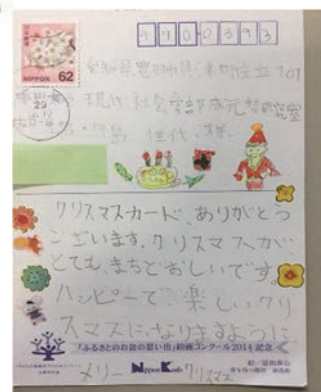
〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立 101

中京大学 ^{せんうおんちよる} 成元哲研究室

TEL & FAX: 0565-46-6516 (直通)

E-MAIL: sungwonc@sass.chukyo-u.ac.jp

HP: <https://fukushima-child-health.jimdo.com/>



福島子ども健康プロジェクトだより

Vol.2

新しい日常への道のり

3.11の大震災・原発事故が、人の「からだ」、「こころ」、「きずな」に長期的にどのような帰結をもたらすのか。福島子ども健康プロジェクトは、福島県中通り9市町村で子育て中のお母さんたちの生活体験を記録として残すために、2013年から毎年1月にアンケート調査、3月と8月にインタビュー調査を行ってきました。アンケート調査では、その時々のお子さんやお母さんの生活の様子と健康状態、地域での生活などについてたずねています。時間が経つにつれ、親子の暮らしと健康はどのように変化していくのか、お子さんが成人するまで定期的に記録し、次の世代に伝えていくことが、その目的です。大震災・原発事故という非日常から新しい日常への道のりを、生活記録づくりを通じての伴走です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

2019年7月1日
福島子ども健康プロジェクト

福島市・郡山市・二本松市・大玉村を訪問しました。(2019/3/16~19)

ペップキッズこおりやま



福島駅前にて



福島市内の運動公園





活動記録(2018.4～)

(下線のあるものは、福島子ども健康プロジェクトのホームページからダウンロードしてご覧いただけます)

- 2018.4 NHK 福島「おはようふくしま」に当プロジェクトの調査研究が紹介。
- 2018.4 『中京大学現代社会学部紀要』に「原発不安に関する考察」、「福島原発事故から『新しい日常』への道のり」、「持続する不安、前向きな態度」を掲載。
- 2018.5 第6回調査報告書を作成し、調査対象者、福島県庁、9市町村役場、報道機関に送付。
- 2018.6 愛知県被災者支援センターで行われた第164回パーソナルサポート支援チームの学習会で、「福島親子の新しい日常への道のり:福島子ども健康プロジェクトの追跡調査から」という題で講演。
- 2018.7 福島大学で行われた「第4回原発と人権集会」で、「予防的回避によるケイパビリティの制約と共同性の喪失:区域外原発事故被害の核心」という題で調査結果を報告。
- 2018.9 新潟県庁で行われた「第4回新潟県原子力発電所事故による健康と生活への影響に関する検証委員会」で、「原発事故後の親子の生活と健康に関する調査について」という題で調査結果を報告。
- 2018.9 甲南大学(兵庫県)で行われた第91回日本社会学会大会で、「福島親子の『新しい日常』への道のり 2018:家族の経験を中心に」という題で調査結果を報告。
- 2018.10 『中京大学現代社会学部紀要』に「風化する日常のなかの将来の健康不安」、「予防的回避によるケイパビリティの制約と共同性の喪失」を掲載。
- 2018.10 中京大学現代社会学部紀要の抜刷(「風化する日常のなかの将来の健康不安」)を調査対象者、福島県庁、9市町村役場、報道機関などに送付。
- 2018.11 明治大学(東京都)で行われた、「ふるさとの喪失/剥奪」被害調査研究委員会で、「予防的回避によるケイパビリティの制約と共同性の喪失:避難区域外原発事故被害の核心」という題で研究成果を報告。
- 2018.12 文京シビックセンター(東京都)で行われた第22回原子力市民委員会で、「原発事故後の親子の生活と健康にみるストレス:中通りでの継続的アンケート調査から見てきたもの」という題で調査結果を報告。
- 2018.12 調査対象者の子どもたちにクリスマスカードを送付。
- 2019.1 第7回アンケート調査を実施。
- 2019.3 福島市、郡山市、二本松市、大玉村でアンケート調査対象者にインタビュー調査。
- 2019.4 日本学術振興会より科学研究費の交付内定通知(今後4年間福島調査継続が認められる)
- 2019.4 第7回調査報告書を作成し、調査対象者、福島県庁・9市町村役場・環境省・復興庁など行政機関、大学・報道機関などに送付。
- 2019.5 「福島の記憶を未来に:『親子をつなぐサポートブック』と当事者語り部活動」が、トヨタ財団研究助成プログラムの助成対象に決定(2021年4月までの2年間)
- 2019.5 愛知県被災者支援センターで行われた第186回パーソナルサポート支援チームの学習会で、「風化する日常の中の将来不安:福島子ども健康プロジェクト2019年調査から」という題で講演。
- 2019.6 名古屋YWCA 3・11つながるプロジェクト主催の講演会(名古屋YWCA2階ビックスペース)で「なぜ私たちは福島に関わり続けるのか」という題で講演。



家族の記憶を、未来へ贈ろう。

親子をつなぐサポートブック

『GIFT BOOK』づくりに 参加しませんか？

3.11 後の困難な時期をどう乗り越えてきたのか。
そのとき、なぜそのような行動をしたのか。
面と向かっては話せなかった当時の心境や家族の
これまでの歩みを、わが子に伝えておきたい。



こうしたお母さん・お父さんの想いに応え、少しでも力になりたいと考えた私たちは、今回、「親子をつなぐサポートブック『GIFT BOOK』制作プロジェクト」を立ち上げました。家族で話し合いながら記録するコミュニケーションブックとして。他の家族と語り合い、さまざまな想いを共有するためのツールとして。10年先、20年先の家族への贈りものとして。わが子の誕生や成長、東日本大震災・原発事故後の暮らし、そして「今」と向き合い、かけがえのない記憶を未来に語り継いでいく、その第一歩になることを願っています。



『GIFT BOOK』のねらい

1. わが子の成長を記録。

生後間もない頃からのわが子の成長を振り返り、その日々の尊さ、親子の愛情を再確認します。





2. 親の想いを伝える。

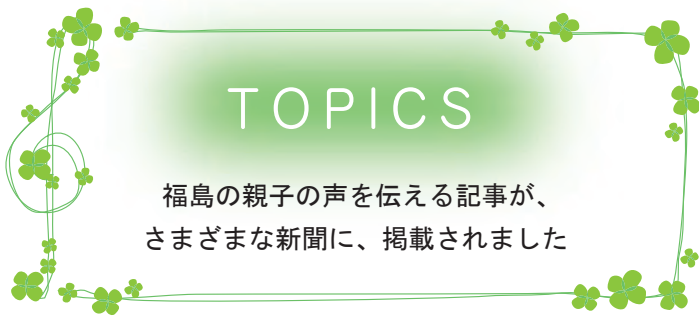
なかなか口に出せない想いを書き出し、いま・これからを生きるわが子への言葉をまとめます。

3. みんなで語り合う。

各家庭の「3.11 後」を語り合い、想いを分かち合うためのキッカケとしても役立ちます。

参加のステップ

- 1 同封のハガキに必要事項を記入し、返送してください。
- 2 『GIFT BOOK』フォーマットと返信用封筒をお送りします。
- 3 フォーマットに記入してください。
- 4 返信用封筒にフォーマットを入れて、返送してください。
- 5 製本された『GIFT BOOK』が届きます。フォトスペースに写真を貼り、ご家族みなさんでいろいろな話をしながらご覧ください。



TOPICS

福島の親子の声を伝える記事が、
さまざまな新聞に、掲載されました

東京新聞 (2019. 3. 14)

**モニタリングポスト撤去
福島の母親65%反対**

中京大教授調査

モニタリングポストの撤去をめぐり、福島県内の母親らから反対の声が聞かれるようになった。中京大の調査によると、撤去を反対する母親は65%に達した。反対理由として「放射線の影響が心配」「子どもへの影響が心配」などが挙げられた。

「いじめ差別」不安続く

中京大教授が追調査

結果は授業の題材に

福島県内の母親らから「いじめ差別」に関する不安が続いている。中京大の追調査によると、不安を感じる母親は依然として多い。結果は授業の題材に活用され、子どもへの教育に活かされている。

読売新聞 (2019. 4. 11)

余論

農 孝生 福島の母子の不安

「結果、子どもが不安を感じた」という不安が、いじめ差別につながるのではないか。福島県内の母子の不安は、依然として続いている。農孝生氏は、母子の不安を軽減するために、学校や地域でサポートが必要だと訴えている。

熊本日日新聞 (2019. 5. 5)

聖教新聞 (2019. 1. 24)

原発災害からの再生

福島県中通りの親子へ調査を継続

文化

原発事故後の生活実態を調査し、親子の生活実態を把握している。調査結果は、文化や教育の面で活用されている。

不安、ストレスが分断を生む

心の救済つながりの回復必要

不安やストレスが、親子の関係を分断させている。心の救済やつながりの回復が必要だとされている。

おたより広場

いろいろな気持ちを伝えあおう！

保護者の方からの声

こちらのアンケートを拝見させて頂くと、同じような意見の方もいらっしゃるの、とても安心いたします。本音を話す方は福島ではタブーな感じすらあるので、他のお母さん方の意見を知れるので、ありがたいです。ありがとうございます。

(福島市の T さん)

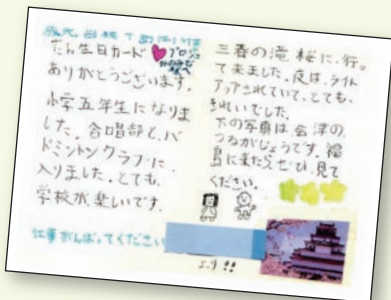
みなさまからのお便りや
ご意見をお待ちしています。
下記までお寄せください。

福島

子ども健康
プロジェクト

〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立 101
中京大学 成元哲研究室
TEL & FAX: 0565-46-6516 (直通)
E-MAIL: sungwonc@sass.chukyo-u.ac.jp
HP: <https://fukushima-child-health.jimdo.com/>

*このリーフレットは、トヨタ財団研究助成プログラム(D18-R-0325)により作成しています。



福島子ども健康プロジェクトだより

Vol.3

福島を記憶を未来へ：記録なくして事実なし

かつて「記録なくして事実なし」という言葉で、記録を残すことの大切さを訴えた人がいました。原発事故が「からだ」、「こころ」、「つながり」にどのような影響をもたらすのか。福島県中を通り9市町村に住んでいる親子の生活と健康を定期的に記録し、次の世代に伝えていく。そのために、2013年から毎年1月にアンケート調査、毎年3月と8月にインタビュー調査を行っています。そして、2019年には、これまでの7回の調査の回答結果を、回答者自身が振り返ることができるように「振り返り手帳」として制作し、お送りいたしました。2020年は、ワークショップ「語り合いの場ふくしま」を開催し、調査参加者同士の交流を行っています。コロナ禍において、原発事故後の生活を振り返り、語り合うことによって、多様な体験をより多くの方と共有する機会としたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

2020年12月1日

福島子ども健康プロジェクト 成 元哲

2011年3月 東日本大震災・原発事故

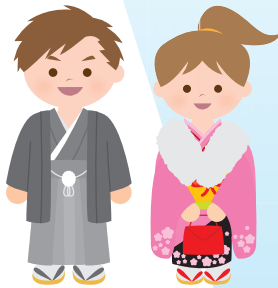
2013年1月、9市町村の2008年度生まれ全員に宛てて、福岡大学医学部から「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」と題したアンケート調査票（第1回）を発送

2015年4月 小学校入学

2018年1月 1/2成人式

2021年1月
アンケート調査票
（第9回）を発送予定

2021年3月 小学校卒業
大震災・原発事故から10年





活動記録(2019.7～)



(下線のあるものは、福島子ども健康プロジェクトのホームページからダウンロードしてご覧いただけます)

- 2019.7 「福島子ども健康プロジェクトだよりVol.2」を発行。
- 2019.7 『中京大学現代社会学部紀要』に「福島之母かく語りき」を掲載。
- 2019.8 福島市、郡山市、本宮市で、アンケート調査対象者に面会し、今後の取り組みについての要望などを聞くインタビュー調査を実施。
- 2019.10 第92回日本社会学会大会(東京女子大学)で「福島における分断修復学の創成」という題で研究成果を報告。
- 2019.10 「親子をつなぐサポートブック『GIFT BOOK』」を発送開始。
- 2019.11 「ふり返り手帳」を申込された調査対象者へ発送。
- 2019.11 「ふり返り手帳」と「親子をつなぐサポートブック『GIFT BOOK』」を手にとったご感想をお聞きするために、福島市、郡山市でインタビュー調査を実施。
- 2019.12 調査対象者の子どもたちにクリスマスカードを送付。
- 2019.12 『中京大学現代社会学部紀要』に「長期追跡調査における調査者と調査参加者の関係の変容—福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査2013年～19年を中心に—」を掲載。
- 2020.1 第8回アンケート調査を実施。
- 2020.4 第8回調査報告書を作成し、調査対象者、福島県庁、9市町村役場、報道機関に送付。
- 2020.6 『中京大学現代社会学部紀要』に「原発事故10年目の春、福島之母親たちの声」を掲載。
- 2020.11 ワークショップ「語り合いの場ふくしま」を郡山市と福島市で開催。

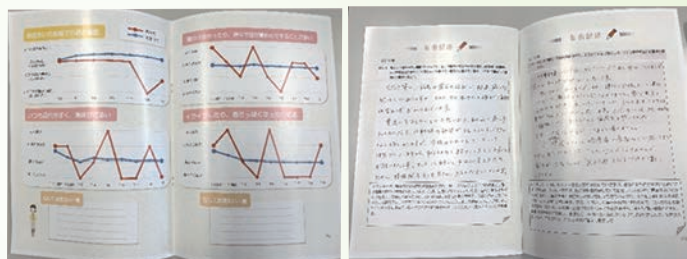


ふり返り手帳

これまでのアンケート調査の回答を冊子としてまとめ、「ふり返り手帳」を制作しました。「親子をつなぐサポートブック」と同様に、これを利用して東日本大震災・原発事故後の生活をふり返り、次の一步を踏み出すきっかけになればと考えました。

これまでアンケート調査に回答した 932 名にふり返り手帳の案内を送付し、93 名から送付希望の返信ハガキが届きました。その 93 名の希望者に第1回調査から第7回調査までの回答の変化を示すグラフと自由回答欄の声を掲載し、「ふり返り手帳」を作成、送付しました。

来年は調査対象者の子どもたちが小学校卒業という大きな節目を迎えます。それに合わせて、第9回のアンケート調査までを含めた『最新版ふり返り手帳』の制作を検討しています。



ふり返り手帳を受け取った方の感想

福島市の K さん

ふり返り手帳の自由記述を読むと、その時その時で色々考えてたんだなって思いました。悩んでいたというか考えていたことを、こうやって残っているっていうのはすごくありがたい。

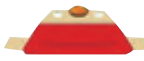
自分でも、その時その時の考えというのは書き留めていないので。その時は真剣に答えるんですけど、答えて送ってしまうとまた日常に引き戻されて、毎日が忙しくて。これまでの自分の回答を通して見ることは今までなかったので、今回初めてそれをグラフにしてもらって、自分の言葉を読むと、ずっと一貫して「心配だ」っていうことを書いてありました。それはずっと頭から離れないんだな、という発見がありました。

郡山市の U さん

子どもに見せるというよりは、自分の記録としてとっておけるものだと思います。

過去の自由記述を読むと、その時の自分の心情を思い出せますね。葛藤してた、不安だったなど。読んでいくと、生活が落ち着いていくのがわかります。こうして書いたものが戻ってきて、(これまで受け身的に協力してきた調査が)自分のものになった感じがします。





ワークショップ「語り合いの場ふくしま」(第1回)開催報告



コロナ禍という厳しい環境の中ではありますが、調査参加者同士の交流を図るためのワークショップ「語り合いの場ふくしま」を開催することができました。ワークショップに参加された皆様、そして、この場をご支援いただいた皆様、ありがとうございました。

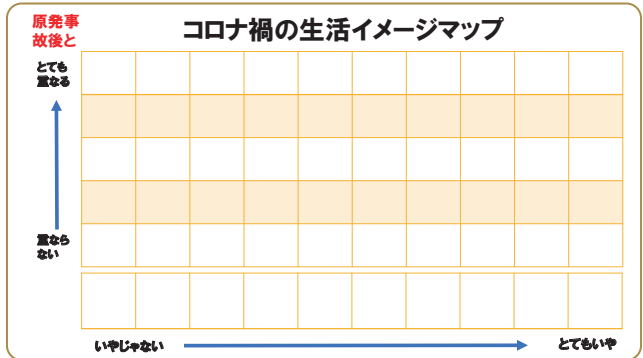
ワークショップ「語り合いの場ふくしま」は、当初、2020年2月と3月に開催する予定でした。しかし、コロナ禍により延期し、その後も、オンラインでの開催を含めて何度も試みましたが、いずれも開催に至りませんでした。それが2020年11月によりやく開催に漕ぎつけることができました。

ワークショップでは簡単な自己紹介のうえ、「コロナ禍の生活イメージマップ」を使って、コロナ禍で特に印象深い出来事を原発事故後の経験と比較して、自由に語り合いました。今後、毎月一回の間隔で開催することができればと考えています。ご都合がつく方は是非ご参加ください。これまで9年間、調査する側(調査者)と調査される側(調査参加者)として向き合う関係でしたが、ワークショップ「語り合いの場ふくしま」の開催を通じて、調査対象者同士をつなぐことができ、その次は、調査対象者以外にもつなぐことになればと考えています。

「コロナ禍の生活イメージマップ」ワークシート

今回のコロナ禍で、特に印象深い出来事、ベスト10は？

自分の体調が気になった(健康不安)	子どもや家族の体調が気になった	仕事(の継続)が気になった	仕事がなくなった(失業)	収入が減った	ニュースが気になった
いろいろな予防法を探した・試した	休校になった	家事が増えた	食費が増えた	(食費以外の)出費が増えた	家族で過ごす時間が増えた
人に会えなくなった	気軽に外出できなくなった	(病院)受診するの慎重になった	美容院に行きにくくなった	運動不足になった	体重が増えた
外出時はマスクをするようになった	友人・知人との温度差を感じた	同居家族との温度差を感じた	同居以外の家族との温度差を感じた	3密を気にするようになった	Withコロナのライフスタイルを確立した
もやもやした感じがする	人の目が気になった	差別を感じた	わかりあえない	将来への不安	お稽古事・スクール等が休みになった



ワークショップ参加者の声



郡山市のSさん

この10年、家族や子ども、そして生活を守るのに無我夢中であっという間でした。みなさんのお話を聞いてみたい。子育ての悩みや、今抱えている問題など、大変なのは自分だけじゃない。みんなも同じ。そう思ったのが参加しようと思った理由です。いろいろなお話を聞いて貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。将来について一度ちゃんと家族と息子と話をしよう決めました。

郡山市のKさん

今回参加した理由は、どんな方が調査をされているのか会ってみたかったこと、同世代の子育ての情報交換、放射線について気をつけていることはあるのか、保養には行っているのか、身近な方で震災後、長く避難している方はいないので、避難されて戻ってきているならどんな生活だったのか、お聞きしてみたかったことなどです。参加者の皆さんの発言の中で、震災後の方が子どもたちを守る術が見えず、辛かったと話されていることは同感でした。福島県に暮らすもの同士、今回のように吐き出したいものは吐き出してまた明日を生きていければ良いと思いました。

今後の予定 (※コロナ禍の影響により、日程やオンライン開催など変更の可能性あります)

福島市内	1月23日(土) 14:00 ~ 16:00
	2月21日(日) 10:00 ~ 12:00
	3月20日(土) 14:00 ~ 16:00
郡山市内	1月24日(日) 10:00 ~ 12:00
	2月20日(土) 14:00 ~ 16:00
	3月21日(日) 10:00 ~ 12:00

※ワークショップは新型コロナウイルス感染症対策(マスク着用、換気・消毒など)を実施のうえ行います。
※場所は福島市内と郡山市内を予定していますが、詳細については追って連絡します。オンライン開催となった場合、自宅での参加が叶わない方は、オンライン会場を用意する予定です。
※これまでのアンケート結果、「ふり返し手帳」などをお持ちの方はご持参ください。
※出席者には交通費(実費相当額)、薄謝(クオカード2000円分)をお渡しします。





見えない恐怖…子どもへの影響「原発事故後の避難生活と共通点」

2020年4月16日(木) KHB東日本放送

目に見えないウイルスへの不安、長期化する学校の臨時休校。異例の事態に子どもたちや保護者はどう向き合えばいいのか。専門家に聞きました。

福島県の子どもの生活と健康に関する調査を続けている中京大学の成元哲教授。新型コロナウイルスが子どもたちにもたらす影響は原発事故後の避難生活による影響と共通点があると指摘します。

成元哲教授「放射能もコロナウイルスも目に見えないものなので、それをどう受け止めるという問題で、大人が不安になっていたり、不安をめぐって、危険なものをめぐって、例えばお父さんお母さんが認識のずれがあって言い争いをしたりとかを見ると、子どもも当然ながら不安になる」。

原発事故では外で遊べないなどの制約が子どもの運動不足やストレスの原因となりましたが、今回は屋内での活動も制限され、よりストレスを抱えやすい状況にあります。

成元哲教授「一方ではすごく厳しく注意して、他方ではいいよいいよみたいな形になると、子どもはどうしたらいいんだろうと感じると思うのです。それぞれ様々な対応、様々な認知の仕方があっていいんだということを認め合うことが必要ということが前回の教訓としていま考えられることかなと思います」。

先行きが見通せない点も共通していて子育てに不安を感じる保護者へのケアが必要だと話します。

成元哲教授「福島でもそういったときは皆さん保養に出かけたりして、保養の場所で自分たちの思いの丈を共有して自分だけじゃないんだということをお互いに共有して励ましたり励まされたりということがあったが、空間をともにしながら思いの丈を語り合うというのはなかなか難しくなるかもしれないので遠隔でオンラインでバーチャルで関係性を持ってお互いの経験を共有できる場があれば、少しは先が見えて来るのではないかな。今までだったら例えば虐待なりなんなり問題があったら児童相談所とかそういう限られた場所しかないんで、そうじゃなくて、もう少し家庭に対するリスクを相談できるようなそういうところを増やしていくということなるだろう」。



皆様からの
お便りやご意見を
お待ちしております。
右記まで
お寄せください。



〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立 101
中京大学 成元哲研究室
TEL & FAX : 0565-46-6516 (直通)
E-MAIL : sungwonc@sass.chukyo-u.ac.jp
HP : https://fukushima-child-health.jimdo.com/



福島のお母さんと「もう一つのつながり・居場所」を!!

みなさん、こんにちは。東日本大震災・原発事故から間もなく12年。幼かったお子さんたちも来年は中学3年生ですね。その成長を喜ぶとともに、思春期真っただ中のお子さんたちの子育てに悪戦苦闘されている毎日ではないかと思えます。

福島子ども健康プロジェクトでは、「語り合いの場ふくしま」の一環として、今年の6月から9月に全4回の思春期の子育てに関する連続セミナーを「対面」と「オンライン」で開催しました。福島と東京、大阪、愛知、ドイツのミュンヘンなどを結び、それぞれのママさんたちが、子育ての不安や悩みを共有するとともに、日常からちょっと離れ、新しい学びがあったり、発見があったり、それぞれ、リフレッシュできる時間を過ごされたのではないかと思います。私たちは、これからも、離れた地域のママさんたちを結ぶ「もう一つのつながり・居場所」を、福島のお母さんといっしょに作っていければと考えています。もしよかったら、どうぞよろしく願いいたします。

2022年10月21日

福島子ども健康プロジェクト 成元哲、牛島佳代

2021.4.24

「福島の人にとって、マスクを当て、屋内にこもって暮らすのは、原発事故以来2度目であることも忘れてほしくありません」
新型コロナウイルス禍の中、作家の柳美里さんが、2011年以降、福島第1原発事故の影響でロックダウン（都市封鎖）に近い生活を強いられた人々を思いやっている。
柳さんは12年から福島県南相馬市の臨時災害放送局ラジオで、地元の人たちの話を聞く番組を始めた。15年には同市に移住。本屋を営み、地元の人たちと触れ合ってきた。
放射能への不安を身近に感じた人たちは、今のコロナ禍をどう思っているのか。中京大の成元哲教授らが13年から毎年続ける親子対象のアンケートに、今年678人（4月20日現在）の保護者が答えた。
それによると86%の人がコロナ禍と事故後の生活を「重なる」「ある程度重なる」と回答。「気軽に外出することができなかった」「外出時

射程 フクシマとコロナ

「福島市の母親（48）は自由記述に「放射能もコロナも、人々を分断させる」と書いた。現在は避難先の岡山県で暮らす男性（44）は「友人、職場、親族と危険度合いに対する考え方の違いと、それによる違和感、感情の対立」があったという。
「フクシマ」では、人によって放射能への不安に温度差があったり、避難に対する補償の線引きによって、人々の信頼関係や連帯が損なわれたりした。そのことで友人、家族、地域、県境などさまじまなレベルで分断が生じた。
コロナはどうか。世界各地で報道され、身近にも見聞きする差別や摩擦を見ると、やはり分断が生じているように思える。ウイルスは人の身体だけでなく、人間関係も侵食している。そのことに目を向け、フクシマの教訓を生かしたい。（農孝生）

活動記録(2020.12～)

(下線のあるものは、福島子ども健康プロジェクトのホームページからダウンロードしてご覧いただけます)

- 2020.12 「福島子ども健康プロジェクトだより Vol.3」を発行。
- 2020.12 調査参加者の子どもたちにクリスマスカードを送付。
- 2020.12 『中京大学現代社会学部紀要』に「持続的なトラウマ 原発不安の変化と特質に関する研究」を掲載。
- 2020.12 東京新聞「ふくしまの10年 母と娘 自主避難という選択⑦」に調査結果が紹介される。
- 2020.12 『こどけん通信』vol.18(2020年12月冬号)に「福島の記憶を未来へ」を掲載。
- 2021.1 第9回アンケート調査を実施。
- 2021.1 ワークショップ「語り合いの場ふくしま」をオンライン(ZOOM)で開催。
- 2021.2 中日新聞・東京新聞に「原発事故後の不安 コロナ禍と「重なる」」として第9回調査結果が紹介される。
- 2021.2 ワークショップ「語り合いの場ふくしま」をオンライン(ZOOM)で開催。
- 2021.2 手記プロジェクト「拝啓 10年後のわたしたちへ」の申込方法を発送。
- 2021.4 熊本日日新聞に「フクシマとコロナ」として第9回調査結果が紹介される。
- 2021.4 手記プロジェクトに申込された調査参加者に「ふり返り手帳」を発送。
- 2021.5 第9回調査報告書を作成し、調査参加者、福島県庁、9市町村役場、報道機関に送付。
- 2021.5 福島民友新聞に「コロナ禍の生活 原発事故後と重なる8割」として第9回調査結果が紹介される。
- 2021.7 聖教新聞に「集合的トラウマとしての原発事故 福島子ども健康プロジェクトから見てきたもの」を掲載。
- 2021.8 梨の木ピースアカデミーにて「集合的トラウマとしての原発事故、分断修復の試み」と題し報告。
- 2021.12 調査参加者の子どもたちにクリスマスカードを送付。
- 2022.1 トヨタ財団広報誌 JOINT〔ジョイント〕No.38 に「地域における分断・人間関係を修復する手がかりに」を掲載。
- 2022.6 連続セミナー「みんな、子育てどうしてる？ 子育てにかかわるコミュニケーションを考える」第1回を、郡山市商工会議所とオンライン(ZOOM)で開催。
- 2022.7 連続子育てセミナー第2回をコラッセ福島とオンライン(ZOOM)で開催。
- 2022.7 『中京大学現代社会学部紀要』に「トラウマを抱えたコミュニティ 集合的トラウマの社会学」を掲載。
- 2022.8 連続子育てセミナー第3回をオンラインで開催。
- 2022.9 連続子育てセミナー第4回をオンラインで開催。



子育てにかかわるコミュニケーションを考える」開催報告

子どもたちは中学生となり、思春期にさしかかっています。成長著しい子どもとの向き合い方について、心理学や社会学から新たな視点を学び、身近な人より快適に過ごすヒントをえる場として、計4回の連続セミナーを開催しました。講師は第1回、3回は水木理恵さん(福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センター助手)、第2回、4回は出口真紀子さん(上智大学外国語学部教授)、企画・運営をリードしてくださったのは栗本知子さん(あおぞら財団特別研究員)でした。講演内容から子育てに役立つポイントをご紹介します(詳細は当プロジェクトHPで公開中)。

第1回

「あなたとわたしの境界線 自分を守り、人を傷つけない
コミュニケーション」

ポイント 自分と他者の間には境界線があります。その内側の気持ち、考え方、行動は自分自身が決める大切なものです。子どもが小さい頃は親が境界線を越えて助けますが、発達年齢にあわせて、親は子を尊重し、独立性と依存性のバランスを調整し続けることが大切です。



第2回

「日米子育て事情 ご近所とのつきあい方、どこが一緒にどう違う？」

ポイント 日本は他者とのつながり、関わりを大切にする協調型自己観でしたが、徐々に西洋的な独立型自己観へ変化しています。内集団(世間)が息苦しいときは、付き合いは浅くし、SNSなども活用して、自分らしくいられる友人と付き合うなど、柔軟にいろんな自己観を使いこなしましょう。

第3回

「こころもからだも大変身 思春期ってなんだろう？」

ポイント 思春期には、二次性徴など身体も心も大きく変化します。子どもたちが健全に発達し、自分の情緒を適切に調整する方法を学ぶためには、応答性の高い大人との継続的関わりが必要です。思ったより幼い面もある時期ですが、ポジティブな側面に関心を向け、子の親への信頼を育みましょう。なにより、子育てするご自身のセルフケアを大切に！

第4回

「ちよっともやっとする、嫌な言動 マイクロアグレッションってなに？」

ポイント 相手に悪意がなくとも、もやっとする、尊厳を傷つけるような言葉や行動。その背景に、マジョリティとマイノリティの力関係があることがあります。なんだかもやっとするとき、「そうかな?」「自分はそうは思わない」など、意思表示をしてみることで、風通しのいい関係性ができるかもしれません。



セミナー参加者の感想

第1回感想

親子関係における境界線、自分は子ども達を尊重できているのか再確認する良い機会になりました。資料を読み返し、時には振り返って確認することを忘れずに過ごしたいと思います。娘が友人との関係に悩んでいるので、今回のお話を元に彼女の気持ちに寄り沿ったアドバイスが出来るのではないかと思います。また、兄妹間のトラブルにも役立てられるのではないかと考えています。(郡山市Oさん)

第2回感想

セミナーに参加すること自体があまりないので、楽しかったです。勉強になりました。自分が、子育てで大切にしてきたことが、実は、独立型に近い接し方をしてきたんだと知り驚きました。自分が子どもの時に「女だから…」と強制されたことに対する反発からだったのですが、子育てを認めてもらえたようで、うれしいです。(福島市 Kさん)

第3回感想

自分のこどもが思春期なので、理論的な説明も息子がたどってきた成長過程を思い出しながら、うんうん、そういうことだったのね！と感じながら楽しく聞くことができました。特に印象に残ったのは、発達段階はピラミッド型でつまづいたときは2つくらい下に戻って考えること、思春期のこどもは大人として接するけれどたまに赤ちゃんになることです(^)。今のところ中2の息子とひどいバトルはしていませんが、今後対応に困ったときは今日の講座を思い出したいと思います。(郡山市Yさん)

第4回感想

マイクロアグレッションという言葉に最初はピンときませんでしたが、自分の行動パターンを振り返る良い機会になりました。相手が話した内容をあれこれ忖度しているうち、抗議したり反論するタイミングを失い、結局心にモヤモヤだけが残ってしまう…。マイクロアグレッションの概念が自分の中に定着していたら、また違った立ち回り方ができていたのかもしれない。(郡山市Yさん)



セミナー第4回 参加者交流の様子 (2022年9月18日)

今後の予定

「つながる場ふわっと」企画中!

「福島子ども健康プロジェクト」はこれまで、毎年1月のアンケート調査の後、5月には調査結果(報告書)を冊子にまとめて送付し、3月と8月を中心に現地でお母さんたちから直接お話を伺う機会を作ってきました。9月には、調査参加者の声(調査票の自由記述)をまとめた論文を、そして、12月にはお子さん宛てにクリスマスカード、誕生日カードをお送りしてきました。2019年と2020年には希望者の方に、ご回答いただいた内容を個別にまとめた「親子をつなぐサポートブック」と「ふり返り手帳」を送付しました。その後、直接、調査参加者の方とかわる場として「語り合いの場ふくしま」を開催してきました。

みなさんにご協力いただいた膨大な調査結果を記録、分析し、世に問う作業は継続して取り組めますが、今後も、調査参加者のみなさまと各地のママさんたちをつなぐ「つながる場ふわっと」を企画中です。今後も、ゆるく、ふわっと、定期的につながり、顔を合わせておしゃべりする場を開催できたらと考えています。詳細は確定次第、「福島子ども健康プロジェクト」のホームページやFacebook等でご案内いたします。ぜひご参加ください!

皆様からの
お便りやご意見を
お待ちしております。
右記まで
お寄せください。

福島
子ども健康
プロジェクト

〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立 101
中京大学 成元哲研究室
TEL & FAX: 0565-46-6516(直通)
E-MAIL: sungwone@sass.chukyo-u.ac.jp
HP: <https://fukushima-child-health.jimdo.com/>



福島子ども健康プロジェクト

中京大学 成元哲研究室

〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立 101

TEL&FAX : 0565-46-6516

E-mail : sungwonc@sass.chukyo-u.ac.jp

<https://fukushima-child-health.jimdo.com/>

